2

田中さんと鈴木さんは、自然保護に関する日本人の意識について調べています。【A】と【B】は、約五十年前に書かれた自然保護に関する文章です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】

（筑波　常治「緑と青の自然」による）

【B】

（宮脇　昭「日本人と自然の間柄」による）

一　文章中の［ア］・［イ］にあてはまる接続詞の組み合わせとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　ア　だから　　イ　ただし
2　ア　そのうえ　　イ　それとも
3　ア　しかし　　イ　しかも
4　ア　では　　イ　でも

二　【A】の═══線部「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」の和歌について、筆者がこの和歌を取り上げることによる効果を次のようにまとめました。（　　）にあてはまる言葉を、【A】の文章中から十二字で抜き出しなさい。

> サクラの花を惜しむ気持ちがこめられた和歌を取り上げることで、日本人が昔から（　　）をもっていたと捉（とら）える筆者の考えにつなげる効果。

三　【B】の文章中の〰〰〰線部Ⅰ～Ⅲのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、楷書（かいしょ）でていねいに書きなさい。

Ⅰ　ハッテンさせて　　Ⅱ　便（〰〰）　　Ⅲ　キズいて

四　【B】の ═══ 線部①「そびえていた」の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　邪魔（じゃま）になっていた
2　急速にのびていた
3　広く生えていた
4　高く立っていた

五　【B】の――線部②「よく知っていた」に対する主部として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　昔の人たちは
2　自然の緑が
3　できないものだということを
4　長い間の経験で

六　田中さんと鈴木さんは【A】と【B】の文章を読み比べて、気付いたことを話し合いました。

田中　読んでみてどうだったかな。
鈴木　【A】には、ヨーロッパの人々と日本人の、自然に対する捉え方が書いてあったよ。
田中　ヨーロッパの人々は、自然は人間と（③　四字　）ものであり、ずっと利用するためには保護・育成しなければならないとも考えていたのだね。
鈴木　それに対して、日本人は、自然は人間に（④　九字　）ものだと考えていたようだよ。
田中　確かに。【B】を読むと、日本では、自然との共存や（⑤　二字　）が大切にされていたことが分かるね。
鈴木　そうだね。ただ、日本人の自然との付き合い方に関して、二人の筆者の捉え方には、違いがあるようだよ。【A】の最後には、「自然への過度の甘え」があったと書いているけれど、【B】の文章には土地に応じた環境づくりや、無理の少ない自然利用をしてきたとあるよ。
田中　でも、【B】の文章の続きを読んでみると、二人の主張には⑥重なる点もあることに気付いたよ。

(1)　右の話し合いの③～⑤の（　　）に入る適切な言葉を、【A】と【B】の文章中からそれぞれ指定された文字数で抜き出しなさい。

(2) ――線部⑥「重なる点」について気になった鈴木さんは、次の【B】の文章の続きを読みました。

【B】の文章の続き

きみの身のまわりを、もう一度じっくりと見わたしてみたまえ。緑が少なくなってはいないか？ とんぼもばったも姿が見えないではないか。とんぼやばったが生きていけないような環境で、人間だけが何の変わりもなく生きていけるのだろうか？ わたしたちのからだは、結局、自然界の生命集団の中の一つでしかない。残念ながら、科学が進歩するように急激には、肉体は変化しないのだ。だから、文明の進歩につれて自然が破壊され、環境が汚染されていくようなら、人間のからだはそれに順応できず、滅(ほろ)んでいくしかないことになる。

この文章をふまえて、鈴木さんは【A】と【B】の共通点を田中さんに伝えました。その内容として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1 どちらも自然を科学の力で管理するように提案していること
2 どちらも自然を破壊することに対する危機感を述べていること
3 どちらも自然を最大限に利用することの有効性を述べていること
4 どちらも自然を観察して災害を予測するべきだと主張していること